



TITLE:

海外日誌(三十二)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(三十二). 天界 1925, 5(59): 479-484

ISSUE DATE:

1925-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160324>

RIGHT:

海 外 日 誌 (三十二)

文部省在外研究員 山 本 一 清

大正十四年一月二十二日(木)

午前中に、電車でテデーレ川の向ひ岸に行き、有名なサンタンゼロの古城跡と、聖ペテロ大寺院とを見物した。「ロマは一日にして出来たものでない」といふ感じが到る所強く。

午後、聖ペテロ寺の裏通りにア・エマヌエリ教授を訪ね、導かれて「ガチカン天文臺を見た。城柵を其のまゝ、應用した此の天文臺は、構へに於いて大に興味があつた。器械は十五時や十三時級の望遠鏡があるが今日は時間もないので此等は見なかつた。夕暮、天文臺の應接室で暫く待つ内に、臺長ハーゲン師が出て來られ、小一時間も種々の話をした。主として暗星雲や變光星に關すること、時々古今東西の天文家たちの逸話など、大變に愉快であつた。

此の日、宿に歸る途中、エマヌエリ氏に案内されて、パレルモ街にツエルリ教授を訪ふた。教授はテラモ市にある私立天文臺の長であり又、イタリー天文學會の長である。「私は日本語を學びたいと望んでゐます」と言つてゐられた。

一月二十三日(金)

朝、井ンゴリのサン・ビエトロ寺で、有名なミケランゼロのモーゼの像を見た後、カピトル丘上の貴族院樓上に大學天文臺を訪れた。臺長アルメリニ氏は不在で會へなかつたが、一教授の案内で、諸設備を見た。天文器械としては案外貧弱で、五時の赤道儀の外に、四時ぐらゐの天頂儀(?)と三時のバムベルヒ午儀があつたばかり。尤も、天文以外に、氣象の觀測を可なりやつてゐる。先頃、ロマ學院の天文臺が此の大學天文臺に合併せられたと聞いたけれど、それは今は單に名義上のみの變更と思はれる。

午後、ガチカン宮殿内の多くの美術品を見つゝもりで、行つて見た

が、劍を持つた番僧に、毎日二時限り閉鎖されるのだに注意されて、がっかり。止むなく引き返し、サン・ビエトロの廣場から馬車を驅りテデーレ河畔、ボ・ロ廣場、ボルゲーゼ公園あたりをドライブした。

一月二十四日(土)

朝五時半ナボリ着、電車でプレビシト廣場あたりまで行き、それから歩いてパレルモの街のホテル・コンチネンタルに入る。

朝、旅用のため、クック社及びギユナード會社に行き、後、ロマ街の美術館で數時間を費した。一階の彫刻にも二階三階の繪畫やボンベイ發掘物にも可なり面白いものがあつたけれど、館内の經營振りが如何にも乞食的に出来てゐて、不快であつた。

午後は、三時頃、電車でダンテ廣場からカボザ・モンテに登り、王立天文臺を訪れた。始め、臺長不在で一助教授の案内を受け、氣象部や地磁氣部と共に、天文部として四時ライヘンハバ子午環、六時レプソルド子午環、六時英式赤道儀及び六時獨式赤道儀を見た。恰も此の日は當地で午後四時二十二分半から日食が見え、臺員諸氏と共に之を觀望した。空に雲はあつたけれど、第一觸の觀測は立派に出來た。――食後、臺長ベンボラード教授に會ひ、獨逸語で種々の話した。臺長はカタニア天文臺から送られた多くの天體寫眞板測定を説明せられた。又臺長の言によれば天文臺屋上の三時望遠鏡は昔ガスパリスが十個の小遊星を發見した器械であるといふ。

夕方、宿へ案内者アントニオ・ブロンズ氏が來訪して、いろいろ愉快な話をせられた。

一月二十五日(日)

朝十時、チルクム・グスー井オ電氣鐵道にのり、グスー井オの山や附近の變つた景色を見てゐる中に、十一時過ボムベイのノラ驛に着すぐ東のノラ門から有名な此の古代市街跡に入つた。ノラ街を未だ進まない内に、左側に六人の骸骨が折り重なつたまゝの家を見て、まづ度膽をぬかれた。フォルムのジュビター神殿を見た後、一先つ西のマリン門外のホテル・スホスで晝食をたべ、少憩後再び入市。展覽室で

は人體の見事な化石に驚き、それから裁判所や、アポロ神殿、集議所、大小の劇場、浴場、其の他多くの宏壯な住宅など、又其の中に残る多くの美術的壁畫を見た。街路も室々も案外小さいこと、しかし街路に歩道と車道との立派な區別、店舖の構へ、邸園の配置など、深い興味をそゝるものがあつた。確かに之れは東西獨歩の見ものである。午後四時、マリヤ門外の停車場から國有蒸氣鐵道にのりナホリに歸る。

一月二十六日(月)

今日鹿島丸に乗船するつもりであつたが、船が遅れたため、午前中は買ひ物いろ／＼、午後は馬車で海岸をホシリホの岬までドライブなごした。

一月二十七日(火)

いよ／＼今朝鹿島丸が入港したので、同じホテルに泊つてゐた日本人六人、バスに送られて出で、新イムマコラテラの岸壁から乗船した。吾々兩人は二等の第十六室。――午後〇時五十分出帆。カブリ海峡を通過して南す。

夕食は日本食で、意外の大喜び。

夜十時右舷にストロンボリー火山の火の柱を見る。

新聞報によれば、去る二十四日の日食は、ロンドンもバリも烟霧で観えず、米國も中部と中西部は駄目、東海岸だけは見事な天気で、立派に観測が出来た由。

一月二十八日(水)

天氣は好く、氣温は暖かい。船は全くゆれず。(メツシナ海峡は今曉早く通過した。)

夜十時、早くも、南天の水平線にカノプス星を見る。

正午の船の位置、北緯三十七度四分、東經十八度六分。平均速度十四哩。おくてゐるので船足が速められてゐる。

一月二十九日(木)

終日クレタ島を左舷に見、かつて讀んだ此の島の考古學的研究を思ひ出して、古代の先驅文化のこゝなご考へる。又、翻つて、聖ボーロ

の第四航海の難事など思ふ。

正午の位置、北緯三十四度五十六分、東經二十四度二十八分。

一月三十日(金)

毎朝、船中にある英國宣教師たちが聖書の集りをするので、自分等も今日から加入することとする。今日は使徒行傳第八章。

午後八時ボート・サイドに入港。其の少し前から陸上に突發した火事で乗船者たちは可なり騒いだ。入港すると、直ぐ、多くの物賣りが船に上つて来て、甲板は忽ち夜店と化し、深更まで賑はしかつた。船は此所で石炭をつみ込み、夜半過ぎ出帆、スエズ運河に入る。自分あての郵便物(主として新聞や雜誌)をボートサイドの日本領事館より受取る。

黑崎氏が聖地旅行を終へて、こゝから本船に乗り込む。

正午、北緯三十二度十七分、東經三十度三十六分。

一月三十一日(土)

朝起きて、始めてスエズ運河なるものを見る。――兩岸は一面の砂漠、駱駝乗りが時々見えたりする不思議な土地を貫いて、左程大きくもない川ぐらゐの運河を、船は静かに進む。時々、船と船とが行き違ひ、ために停船して待ち合はすこともある。――正午イスマイリアの町を右に見、テムサ湖を通過。かうして今日は終日運河の中である。午後には大小のビター湖を通過した。

午後八時スエズ港に入り、運河のために附した舵を船から取り外すことなどがあつた後、九時出帆。紅海に入る。

二月一日(日)

午前中、左舷に突骨たるシナイ山と其れに連なる山々が見える。波は高いけれど、追手の風で、船はゆれない。

日曜なので、九時半から、少し念の入つた聖書の會があつた。(本船には、二々だけでも十六人の宗教家が乗つてゐるとは珍らしい。)

船が益々南下して、今夕は六時にアカナー(エリダ星座のア星)を南の水平線に見た。

正午、北緯二十七度九分、東經三十四度二十一分。

二月二日(月)

朝四時、起きてB甲板の右舷に出て見ると、有名な南十字星座とセンタウル座のA、β兩星が南に低く輝やいてゐる。此等の星々を、自分は今始めて見るのだ。——太陽系に最も近いといふセンタウルのA星が可なり目につく大きな星なのに驚く。又、南十字は五つ六つの星々の中に、いふん光輝の違ひがあり、十字の形それ自身も不整と言へば不整であるが、それが却つて、或る藝術的な趣きのあるように思はれて面白い。崇高な感じを興へる星座である。——よび起して、英子にも見せた。

朝から夕までの間にも、めき／＼と暑さが増すのが感じられる。船員たちは皆今日から夏服を着る。

朝十時から、船員一同は非常時の端艇操練(之れには船客も浮袋な身につけて参加した)と、消火演習をした。

正午、北緯二十二度三十六分、東經三十七度二十二分。

二月三日(火)

今日から朝と夕に水泳が許される。しかし充分に暑くないため、泳ぐ客たちは未だ少ない。

午後からデツキ・ゴルフをやり始める。

正午、北緯十七度五十七分、東經四十度十四分。

二月四日(水)

空は晴れであるが、風は向ひ風に變つて波も可なり高い。しかし揺れない。——午前中より船の左右に小島が多く現はれた。夕方、パプ・エル・マンデパ海峡通過

午後七時半から、サルーンで、ミス・ライスの聖地旅行講話があつて、二十人ほど集まつた。——その後、自分は或る英人たちと甲板に出て星を見る。北極星の低いこと!!

正午、北緯十三度三十三分、東經四十三度〇分。

二月五日(木)

風静まり、波おだやか。南十字星座が見えるといふことが漸次船客たちの中に知れわたつた。「今朝四時半に起きました」と言つて一人の

英人が其の星座附近のスケッチを持つて来る。黒崎氏は亦、南十字の左上に彗星見たいなものが見えると言つて來られたが、檢べて見れば其れはセンタウルに座のオメガ星團であつた。

夜八時から、二等サルーンで黒崎氏の聖地旅行談があつた。

正午、北緯十二度十六分、東經四十七度三十八分。

二月六日(金)

朝、アフリカ大陸の東端がアダルファイ岬を右に、又、正午、ブラザース島を左に望み、午後、ソコトラ島を遙かに見た。

船の事務室から、日本人船客名簿が配布された。總計四十四名。——夜、月光を浴びながら、船客の有志たちがC甲板でダンスを始める之れは無聊の時の好い慰みである。

夕方、雲の割れ目から日没を見て、始めて緑閃光(グリーン・フラン)といふ現象を認めた——火星も可なり高い。

正午、北緯十二度二分、東經五十二度四十六分。

二月七日(土)

朝四時に起きて、南十字架とセンタウル兩星座の外に、乙女やスコルピオのお馴染の形、それから土星や木星も見た。

人々の希望により、今日自分は天文講話をすることに、朝のうち、事務室で、まづ宵の空と曉の空に見える主な星々の圖を作る寒天版の原稿を畫いた。——講話は午後四時から二等のサルーンで聞き、主として現に見える星座の話し、それに、質問に應じて、二三の特種な問題を説明した。集るもの三十人ほど。中に船のオフィサーたちも居た。日が暮れて、甲板の上は俄かに素天文家が増し、皆、圖を手にして、夜更けるまで空を見てゐる。

正午、北緯十一度十七分、東經五十八度十四分。

二月八日(日)

朝九時半、二等のサルーンで新敷側の禮拜式があつた。一等や三等の方からも來會者が多く、總計五十人ばかり。リヴァーシヤ氏が説教した。

日没の時、二三人の友と晴れた水平線に見事な緑閃光の現象を見た。

た。月が明るいため、夜の星は好くない。

正午、北緯十度二十三分、東經六十三度二十九分。

二月九日(月)

月蝕を見るため、兩人とも、早朝、午前〇時半に床から起き出た。

ほかの船客たちは一時半頃から漸次甲板に出て、月を仰いだ。月は豫定の如く、〇時三十四分虧け始め、二時六分蝕甚となり、三時三十九分に復圓した。蝕の深さは七分三厘で、虧けた部分は可なりの赤銅色であつた。——蝕の終る頃、南十字とセンタウルの兩星座が南に高く上つて來たので皆々大喜び。

夜九時半、一等甲板で、船員たちの假裝行列が催された。

正午、北緯九度三十六分、東經六十九度一分。

二月十日(火)

朝、左舷にミニコイ島が見えたといふ。——終日雲があり、波は靜かで、時々、海上に鰐が見える。日没後、空が晴れて、見事な黃道光を見る。

英子は帽子を作り始める。

正午、北緯八度十四分、東經七十四度六分。

二月十一日(水)

朝六時半、招かれて二等サルーン内の舊教禮拜式に列した。今日は日本の紀元節なので、戸塚司祭の特別な祈りがあつた。

午後三時、船はコロホ着、すぐ旅券の検査があり、それから各自上陸。自分等は黒崎氏等と總計六人、一臺の自動車を雇ひ、市の内外を見物してまはつた。きたなくもあり、路上の案内人や商人等がうるさくて、可なりいやな印象を受けた。

今夜、甲板客としてシンガポア行き印度人が一人ほご乗り込む。正午、北緯七度十三分、東經七十九度十六分。

二月十二日(木)

早朝一時半コロホ出帆。ひるの間は左舷に絶えずセイロン島の山が見える。

夜八時から二等サルーンで戸塚氏の「基督教雜誌」があつた。十人ば

かり集つて、主に舊教の歴史や制度のことを聞いたのだが、其鳴しかれる點が多かつた。

正午、北緯五度五十一分、東經八十一度八分。

二月十三日(金)

晩餐後、甲板に出て、英子や黒崎氏と共に南天の星を見てゐるうちカノプスの遙か南に大マゼラン雲を見た。之れは小マゼラン雲と共に自分が昨年ハーバードの天文臺に滞在中特別に研究したことがある縁で、見るに一層の親しみがある。形はアレキバ天文臺の寫眞によつて御馴染であるが、何と言つても肉眼や双眼鏡では寫眞ほど明瞭でないしかし、全體として光りの明るいことは全く想外である。

正午、北緯五度五十二分、東經八十六度十二分。

二月十四日(土)

風邪をひいたものらしく、英子は朝から三十八度六七分ばかりの熱が出て、終日就床。——それで二人とも朝の聖書の會には出ない。

夜、木村氏の原始佛教と現代學思想との比較論をよんで可なり興味を覺えた。

正午、北緯五度五十二分、東經九十一度三十四分。

二月十五日(日)

朝九時半から一等サルーンで英語禮拜式、リヅシヤ氏の説教があつた。各國の人々を網羅した四十人ばかりの集りであつたが、偶々船員たちが此の時操艇及消防演習をやつたので、騒々しかった。

コロホ出帆以來曇り空が多い。英子の熱は退いたが、今日は尙ほ床の中にあつた。

正午、北緯五度四十二分、東經九十六度二十五分。

二月十六日(月)

船はマラカ海峡に入り、左右に島や燈臺が見え、又、幾つかの船や海獸などにも會ふ。——英子離床。

夕空が晴れたので西天低くマゼラン小雲をさがしたが、見えない。やはり霧のたなびくためらしい。

正午、北緯三度三分、東經一百度四十四分。

二月十七日(火)

早朝シンガポール港タンジョン・バガリーに着。其の少し前、四時頃に起床し、甲板に出て星を見る。北緯は一度十分。之れが今度の航海中に於ける最低緯度であり、従つて南天には十字架やセンタウル等の星座が高い。それに引きかへ、北極星は低くて、水平線上の霧の中にかくれてゐる。

シンガポールに着いて見れば、隣りに歐洲行きの榛名丸が着いてゐる。早速訪問して、東京大學の緒方氏と京都大學の佐々木氏に會つた。榛名は九時出帆。

赤道直下は流石に寒中でも暑さが甚だしい。

二月十八日(水)

朝早く起きて、涼しい内に上陸して散歩して見たが、暑くて閉口。市街の繁盛地まで行かないで引き返した。

コロンボからの甲板客は昨日此所で下船したが、今日は又支那人が三十人ばかり甲板に乗つた。——船は正午出帆。

夕食後、森川、黒崎諸氏と話して、南西の星々を見る。マゼランの大雲が頗る鮮やかであるが、小雲の方は何と見えない!!

二月十九日(木)

午前中は全く鏡のやうに平らかな海面で、飛魚などを面白く見たが午後から風が出、波が高まり、船が可なり揺れ出したので、皆々ケビン中に引込む。

正午、北緯五度十二分、東經百六度五十六分。

二月二十日(金)

船の揺れが収まらない。殊に吾々のためにはヒチンガが可なりこたへる。食堂は大淋れ。

正午、北緯九度二十一分、東經百九度五十二分。

二月二十一日(土)

シンガポールまで、珍らしい平穩さであつたのに引きかへ、昨今のしげは可なり船と人を苦しめる。食堂への出席者は僅か四分の一。正午、北緯十三度三十五分、東經百十一度四十六分。

二月二十二日(日)

船に逆らふ北風が益々強く、従つて揺れも増す。午前中にあるべき客の日曜禮拜式が今日は行はれず。只、夕食後、僅かの人々が集まつて讃美歌を歌つたばかり。——今日は英子の誕生日であるが、此の船揺れでは大悲觀。床の中で古い日誌など讀み返しながら滯米中の愉快な日を思ひ出してゐる。

正午、北緯十七度四十八分、東經百十三度二十八分。昨日より船の進むこゝ僅かに二百八十浬。

二月二十三日(月)

朝十時香港着。空は曇り、海には雨があり、又、風が急に寒い。シンガポールの酷暑の後、今は急に初冬の氣候である。

夕方、船のつながれてゐる九龍の岸邊を散歩。「東洋二」と稱される夜景の此の香港の電飾の美しさ!!

二月二十四日(火)

朝九時から兩人で下船して、九龍の停車場から報時所あたりを散歩し、それから半クトリア市に渡つて賑やかな街々を見て歩いた。

午後四時、香港出帆。港外に出て見ると、やはり波は高い。

二月二十五日(水)

揚子江の泥水の影響だとかで、今日は既に海の水が濁つてゐる。風も波も幾分か減じた。時々、左舷に陸が見える。

今日からは無線電信による日本からの時事通信が發表される。

正午、北緯二十度二十四分、東經百十七度四十一分。

二月二十六日(木)

久しぶりで天が晴れ、太陽が現はれた。波もおだやか。一等食堂では今夜船員たちの演藝會が催され、可なり夜更けまで賑はしかつた。

正午、北緯二十六度三十三分、東經百二十度二十六分。

二月二十七日(金)

朝、舟山列島の間を船は走る。

午後四時上海着。早速、前田氏と森氏とに迎へられ、又、圖らずも一等客として小泉氏夫妻が乗つてゐられるのを知つた。——さりあへ

ず自動車で吾々六人は日本人青年會館に行き、それから、更に吾々森氏との三人だけはコンノート路の大西氏宅を訪れた。皆々天友達ばかりである。

夜八時から自分は日本人青年會館で天文熱心家たちのために一場の講演をし、後、案内されて大西氏宅にさまる。——氏が最近手に入れたツァイス製四吋口径のハイカラな赤道儀望遠鏡を見た。

二月二十八日(土)

朝、暫く大西氏と天文に關する話をする。氏のために四吋望遠鏡室の設計や場所を定め、又、近刊の天文書を一覽した。十時から森氏の案内で上海の市街所々を見物し、正午には青年會の前田氏に招かれ神戸から來遊中の久留氏を加へ、五人で午餐をいただく。

午後一時、上海出帆。——夜は小泉氏とおそくまで歐米旅行の印象を話し合ふ。

三月一日(月)

朝九時半から日本人九名が集まつて小集會をし、黒崎氏が説教した其の後、小泉氏を中心としたパレストナ旅行談があつた。

船は一路鹿兒島の南を指して進む。正午の位置、北緯三十一度六分東經百二十六度四十七分。海面極めて平穩である。——午後、森川氏に案内されて、自分と英子とは船橋、海圖室、無線電信局、機關室等を見た。

京都の川崎氏と電報の往復をする。いよく日本が近い。

三月二日(月)

朝早く鹿兒島の佐多岬沖を過ぎ、土佐灘に進む。北風が強く、横波を挙げ、船のローリングが可なりあつたけれど、船客は皆いそ／＼と上陸の準備をしてゐる。

正午、北緯三十一度四十七分、東經百三十二度二十六分。

三月三日(火)

朝六時、船は神戸の和田岬沖に到着。検疫や税關検査を受けてゐる間に、更に進んで神戸港第四突堤に着いた。——自分等は多くの親族朋友たちに迎へられ、上陸後、一旅館に少憩其の間に閑をぬすんで、

三四

自分は森下氏等の道案内で海洋氣象臺を訪問。川上氏に迎へられ、十時赤道儀や子午儀や太陽分光器など、天文部の主要設備を見せて貰つた。

午後二時過ぎ神戸三宮發、同四時半なつかしい京都驛に着、新城教授を始め、多くの方々に迎へられた。

前後二ヶ年半にわたる自分等の外遊も之れで全く終りを告げたわけである。(終)

○彗星發見二つ

十一月十九日、コンベンハーゲン天文臺なる天文電報中央局からの電報によれば、去る十一月十七日十一時三十一分九に米國ヤーキース天文臺のザンビースブルック教授は

赤緯 十一時五十六分三二秒 毎日東へ一分

赤緯 (北) 三四度五六分 同 南へ二一分

の所に八等級の一新彗星を發見したといふ。二十日夜以來、京都でも之れを朝早く東天に觀測してゐるが、東北方に尾を見せてゐる。之れ今年度の第十彗星である。

又、次いで十一月十八日にベルリン大學天文臺のギルク氏は

赤緯 十七時 一分三七秒 毎日東へ十七分二〇秒

赤緯 (北) 三五度二八分二〇秒 同 南へ二度三〇分

の所に一新彗星を發見した。光度は七等。京都大學では二十三日の日没から觀測してゐる。之れが今年度第十一番の彗星である。

右、何れも光りが大きく、又、便利な位置にあるから三時ぐらゐな望遠鏡の所有者は觀望し得るだらう。

○中村要氏 一年志願兵として野砲兵第二十二聯隊に勤務中であつた同氏は十一月末除隊となり、大學天文臺へ歸られる筈。